

高等教育研究センター

Research Center for Higher Education

Newsletter

No.045

目次 2019.12

- 平成30年度学内版GP成果報告
勝亦 達夫 助教,
山田 明義 准教授
- 大学院シラバスの書き方
- 高等教育研究センター年報
- スタッフからひとこと



信州大学 | 高等教育研究センター
SHINSHU UNIVERSITY

平成30年度学内版GP成果報告 vol.3

前号に引き続き、平成30年度学内版GPに採択された取り組みをご紹介します。
また、令和2年度の学内版GPの応募〆切は令和2年1月8日までとなっております。皆さまからの多様な取り組みの応募をよろしくお願いいたします。

キャリア教育・サポートセンター 勝亦 達夫 助教 「インターンシップの事前・事後学習セミナーと評価ルーブリックの開発」

はじめに: 課題と目的

キャリア教育・サポートセンターでは、学生が早い段階からキャリアについて考え、なりたい自分から専門を深め主体的な学びを構築できるよう、インターンシップの機会やキャリア教育を推進しています。

インターンシップの拡充においては、3つの課題があると考えています。ひとつは、事前のオリエンテーションは事務伝達が中心となり目標設定や意識の準備が足りない。2つめは、事前学習不足により企業とのミスマッチが起き、学びたいこと、知りたいことが修得できずに終わってしまう。3つめは、事後のふりかえりの時間を確保できていない。学んだ記録を残せず、周囲にも伝えるという機会が持てないため本人の中だけで完結してしまい、周囲のフィードバックが得られず、どう学ぶことができたのかが確認できないという課題がありました。そこで、平成30年度学内版GPに申請させていただき、学生がインターンシップに参加する前に備えるべき素養、マナーを修得し、意識付けや心構えをして企業の支援に依存することなく自立した活動ができるようになることを目的として、インターンシップ・セミナーを開講しました。その事業成果について報告します。

インターンシップ・セミナーの実施

具体的な事業として主に次の2つを実施しました。

①信州産学官連携インターンシップ(県内・海外)事業に関連し、インターンシップの事前・事後学習を各地キャンパスで全8回開催しました(図参照)。事前学習で、インターンシップに参加する上での手続きやマナーについて学ぶとともに、事前の課題設定の重要性を伝えました。

②取組達成の可視化のために「インターンシップ・ルーブリック」を開発し、事前学習の段階からチェック表として活用できる指標を整備しました。事後学習の際にも自己評価として利用しました。

○ 平成30年度 通年不定期でインターンシップ・セミナーを開催

2. セミナーの実施内容・流れ

4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
事前授業			実習			事後学習		
企業調査書集	企業訪問	マナー講座	事前評価	プログラム準備	インターンシップ	報告書の作成	学びの記録	学びの発表
eポートフォリオ						次の学びの推進色		
自己分析、学習目標を設定し記録						学んだ事のまとめ、評価(自己・外部)を記録保存		



図: インターンシップ・セミナーのスケジュール

取組達成を可視化する「インターンシップ・ルーブリック」の開発

学生がインターンシップでの達成感(自己効力感)を確認する指標として「インターンシップ・ルーブリック」を開発しました。シートはチェック表になっており、事前・実習中・事後において必要な手続きや心構えを

○ インターンシップ・ルーブリックの開発(採点表)

項目	評価	採点	備考
事前学習	1. 企業調査書の集め方 2. 企業訪問のマナー 3. マナー講座の参加 4. 事前評価の記入	100	
実習中	1. インターンシップの申し込み 2. インターンシップの参加 3. インターンシップの報告書の作成	100	
事後学習	1. インターンシップの振り返り 2. インターンシップの発表 3. インターンシップの記録	100	

- ・ ルーブリックを記入し、✓をしてみてください。できたこと、できなかったことを評価してみてください(オレンジ:1点、青:2点、緑:3点)。
- ・ 未だのところは未記入で結構です。
- ・ 点数を計算してみましょう。自己評価で点数を出してみましょう。
- ・ インターンシップは100点、海外インターンシップは140点

表: インターンシップの評価ルーブリックの採点表

確認できます。項目には、「挨拶をした」「日程を確認した」という基礎的な項目から、「自己目標を受入先に伝えた」「毎日記録をつけた」などの主体性や自己管理を要する項目まであります。終了後に採点表を配り採点してもらいましたが、基礎的な項目は数が多いが点数が少なく、主体的に取り組む項目は高得点ですが項目が少なくなっています。これは、基礎的なことをしっかり積み上げないと点数が取れないように設定しており、高得点の項目ほど少ないが意識してもらうために設計しています。

採点表の項目は縦軸に対自己基礎力(自己認識)、対人基礎力(コミュニケーション)、対課題基礎力(課題設定力)に分類でき、横軸に「手続き→意識の段階→行動の段階→自己実現の段階」で評価するように設定しています。県内インターンシップに参加した学生に自己評価で採点してもらったところ、学生は基礎的なことがきちんと達成され、一方で自発的な取り組みが弱いという結果でした(裏面図参照)。

このルーブリックは、チェック時は項目と基礎力の関係が事後に示されるため、参加するプロジェクトによって数値結果が変化し、達成度が高いほど100%に近づきます。項目ごとに達成感を感じやすく、本人の強み・弱みが可視化されるようになっていきます。

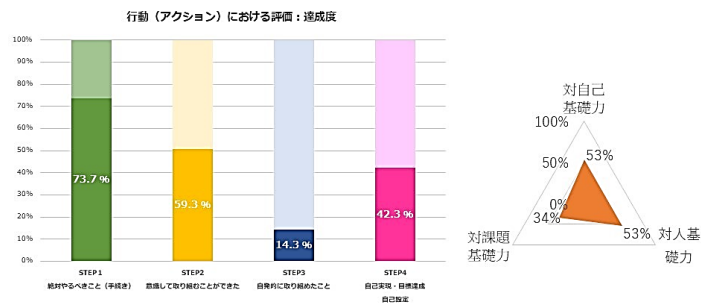
このチェック表は、インターンシップや活動ごとに繰り返し使うことができる評価ルーブリックとなっています。

○ 評価ルーブリックの配点

基礎力	行動(アクション)における段階的評価				得点	割合	%
	継続するべきこと(準備)	準備として取り掛かること(行動)	主体的に取り組むこと(実践)	自己実現、目標達成(結果)			
対自己基礎力	3.0 2.0 1.0	3.0 2.0 1.0	3.0 2.0 1.0	3.0 2.0 1.0	6	57	53.1%
対人基礎力	3.0 2.0 1.0	3.0 2.0 1.0	3.0 2.0 1.0	3.0 2.0 1.0	14	57	53.1%
対課題基礎力	3.0 2.0 1.0	3.0 2.0 1.0	3.0 2.0 1.0	3.0 2.0 1.0	6	51	34.0%
得点(点)	15	10	10	10	45	45	100
達成率(%)	75.0	50.0	50.0	50.0	22.5	22.5	22.5

- 基礎的なことを押さえるほど高得点にもなる
- 事前の目標設定がしっかりできていれば、得点につながる
- 得点の高低に依らない評価

○ 学生の評価ルーブリックの結果(グラフ)



今後に向けて

定期的なセミナーの開催によって、学生の意識付けや課題設定、自分が不足している点について気づきを促すことができました。今後は、セミナーの内容について、学生のレベルや目的によっては「物足りない」と感じる感想もみられたため、ルーブリックを発展させ、また企業側にも同様に評価してもらおうことで、客観的な評価に繋がりたいと考えています。さらに、レポートや学びを蓄積してアウトプットする方法を整備するとともに、振り返りをきちんとして学びを深め、発表したいと考える学生に向けたサポート体制を構築し機会を提供していきたいと思います。

学術研究院農学系 山田 明義 准教授

「『農を基盤とした理工系グローバル人材養成のための実践英語力向上システム』

－3年間の経緯を振り返って－

はじめに

農学部では、アジア地域を中心に留学生を受け入れています。近年は、日本の先進的な農業技術や分析技術、そしてその背景にある学術分野について学ぶべく、多くの海外学生が本学への留学を希望している状況です。一方、農学部に入学者となる日本人学生にも、「農」のキーワードのもとグローバル社会で活躍したいという希望が少なくありません。こういったニーズをうまく教育プログラムに活かす観点から、H28年度より学内版GPの支援を受け標題のプログラムを継続してきました。

夢を実現させるために

「海外で活躍したい」という夢を抱いて農学部に入学者きた日本人学生の多くが、英語力・コミュニケーション能力に対する不安もあって、結果的にその機会を逸してしまう状況がありました。この夢を実現させるための一つの方策として、「生の英語に接する機会を与える」、「留学生との対話を通じて、英語コミュニケーションに対する不安を払拭する」という場を農学部キャンパスに設けました。

松本キャンパスとは違って、農学部には英語を母国語とする教員が一人もおりません。このため、1年次にはある程度継続していた「英語カススキルアップ」の意識が、農学部に来るとなかなか維持できない面がありました。そこで、普段から気楽にネイティブ英語に接する機会(定期的な英語講座の開設)を与えることで、英語コミュニケーションに対する意識的なハードルを下げ、かつ英語のスキルアップを図る気運を高めることができると考えた訳です。また、日本人学生と留学生が交流するためのイングリッシュサロンを定期的

開設し、お互いのコミュニケーション能力の向上を意図しました。



学生の反応とその成果

これは当然かもしれませんが、英語力を身につけたい学生は積極的に英語講座に参加しました。そして、20名以上の受講生が、海外農業実習に参加するに至りました。実習参加者は、専門性と国際性に関するスキルアップを図り、そこで身につけたグローバルな感覚・経験は、今後の人生において大いに役立つと信じています。また、敷居の低いイングリッシュサロンには、過去3年間を合計すると延べ1000人以上という大変多くの学生が参加しました。この交流も当然、海外農業実習等への参加に結びついています。同時に、留学生にとっては、母国で日本人学生が学ぶことが大きな誇りになっているはずで

これからの取り組み

農学部では、今年度も「農を基盤とした理工系グローバル人材養成ICTを活用した英語習熟プログラム」の学内版GPに取り組んでいます。農学部設置されている「国際農学教育研究センター」もこうした取り組みを後押しし、学部全体でグローバル人材の養成を積極的に進めているところです。

大学院シラバスの書き方

令和元年も残りあと一か月！後期の授業がそろそろ終盤に入り、来年度の授業のシラバスを書く時期が訪れました。今月号のニューズレターでは、大学院のシラバスの書き方をテーマに、なぜシラバスが必要なのか、またどのようにシラバスを書くのかということについてご紹介します。

3つのポリシーとシラバス

当センター構成員の加藤鉦三が2019年6月号の「3つのポリシー・ガイドラインの論理的帰結について」の記事で、「卒業認定・学位授与の方針(DP)」、「教育課程編成・実施の方針(CP)」,及び個々の授業の関係について薬の効用

書に喩えました。「DPは、薬で言えば効能書きの性質を持つものです」。「個々の授業はその効能書きの部分部分を担当することになります。それを規定したものがCPです」。要するに、DPは出口で獲得する予定の知識と能力を明示化するものと理解するならば、CPはそれを達成するためのプロセスと手段を示すものであり、個々の授業は出口で身に付

けようとする知識と能力を分担するものと言えるでしょう。シラバスは、すなわちその個々の授業の詳細を記載するものにあたります。3つのポリシーとシラバスの関係については、学部と大学院の両方に適用されます。

なぜシラバスが必要なのか

高等教育のユニバーサル化段階に突入した現在においては、大学・大学院から出たからといって、自ずと高い能力の持ち主と見なされることはもうないでしょう。大学・大学院教育を通して、学生がはたしてどのような知識と能力を身につけているのか、それを明示する道具として、DP、CPさらにシラバスがあります。こうした道具を通して学生の身につけた知識と能力を明示化することは、大学・大学院教育に対して社会の適切な評価を得られるだけでなく、実際の教育効果の向上にも繋がります。

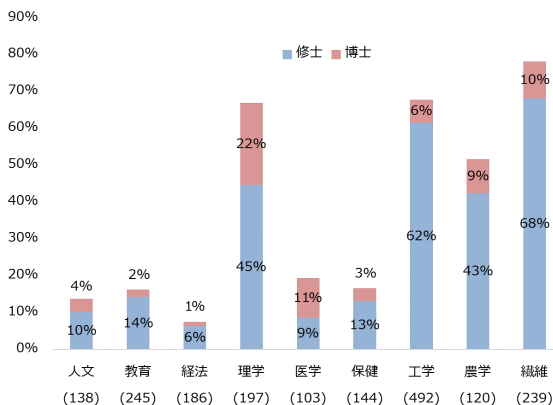
なぜかという、大学・大学院教育が拡大している中で、不本意で進学した学生がかつてより増えたからです。下図は、2017年の5月下旬～6月上旬に本学が実施した「新入生調査」の中で、新入生が希望する学歴を聞いた結果です。進学してから一か月半しか経ていなかったにもかかわらず、多くの新入生がすでに大学院の進学を希望していました。特に理工系の学部においては、その割合が新入生の7～8割にも達しました。これは、2010年の調査より、1割も増加した結果です。信大生が学業に本当に熱心だと感心する一方、理工系なら修士修了が当たり前だという時代の変化も窺えます。例えば、筆者が担当する大学院共通科目「大学院と社会」の授業アンケートで、下記のような進学理由が寄せられました。

「私が高校生の時、理系学部に進学するのであれば、就職時の進路達成のために大学院に進学することは当たり前であるということをよく耳にしました」（2017年度）。

「自分も、どちらかといえば卒業後“やりたいこと”は決まっていない。そのための猶予期間（モラトリアム期間）として、大学院に入学したのが進学の素直な理由である」（2018年度）。

研究をしたいという理由で大学院に進学した院生が大多数であることを先にお断りしたいです。しかし、十分に熟考せずに進学した院生も少なからずいることは否めません。それで、大学院進学を通してどのような知識と能力が得られるか、また個々の授業で何が得られるかを明示できるならば、不本意進学した院生も大学院進学を選択に自信を得られるし、明確な目標も持てるはずで

この作業は大学院教育を修了し、社会に出る時にも、同じく重要です。筆者が大学院生、研究者向けの人材会社アカリクの役員をインタビューした時のある話は極めて印象的です。「自分が持っている知識と能力をうまく表現できない院



図：新入生の希望する最終学歴

出典：「新入生調査」2017年

生が多いです。よって、企業にはアピールできません。抽象的な能力を目に見える形にするように言語化する必要があります。特に高専卒、学部卒との差別化が大事です」（2015年6月29日）。DP、CP、さらに授業シラバスは、院生が持つ知識と能力の言語化及び他学歴取得者との差別化をするための恰好な資料となっています。

3つのポリシーの策定や授業シラバスの作成は、認証評価などの外圧によるものだとしばしば批判されます。しかし、上述したように、実際大学・大学院教育の内部質保証のため、そのニーズは教育現場にもともと存在しています。

どのように大学院シラバスを書くのか

さて、大学院のシラバスはどのように書けばよいのでしょうか。

シラバスは、①授業の基本的な情報、②授業のねらい、③授業計画、④成績評価の方法、⑤成績評価の基準、⑥事前・事後学習に関する情報、⑦履修上の注意という7項目に分けられます。下記は、②③④⑤について、詳しく説明をします。

「②授業のねらい」

前述したように、出口で大学院教育の成果を可視化、言語化するためには、シラバスの中では、学位授与の方針（DP）の要素のうち、この授業で分担するものを指定することが重要です。もう少し詳しく説明すると、授業の達成目標は、この授業で獲得できる学位授与の方針の要素を、この授業の内容に置き換えたものとし、（知識面、スキル面の組み合わせで、またはいずれかの面で）「〇〇ができるようになる」という形とするのが最も理解しやすいと思われます。

「③授業計画」

達成目標を明確にしたうえで、各回の授業のおよその内容と順序、課される課題や小試験等のスケジュールを記述します。課題については、提出期限を示します。受講生が授業の達成目標に到達するためのプロセスについて、教員と受講生の間で共通理解を得ることによって、計画的、効率的に学習できることが主な目的です。それと同時に単位分の授業時間が確保できていることを示す目的もあります。

「④成績評価の方法」

受講生が②の授業の達成目標に到達するために通っていく過程（課題や小試験等）と、到達したことを示すエビデンス（最終レポートや期末試験等）のそれぞれの内容と配点を記述しますが、出席点を加算することはできないという点にくれぐれも注意していただきたいです。このように、成績評価の方法・基準を明文化することにより、どの段階でどのように努力し、さらにどのような成果を期待されるのかについて、教員と受講生との間で共通理解を得ることを目的とします。

「⑤成績評価の基準」

ここで、注意していただきたいのは、成績評価の公正さと透明性を確保するため、成績の評定は、各科目に掲げられた授業のねらい・目標に向けた到達度をめやすとして採点することです。そのためには、「合格水準（＝授業の達成目標への達成度において許容範囲の水準）から見て、何ができていれば『合格水準にある』／『やや上にある』／『かなり上にある』／『卓越している』」と言えるのかを記述することが大切です。

「可」の水準は、授業の達成目標への達成度において許容範囲の水準を表現したものとしますが、その言い方よりも試

験もしくはレポートの出来具合で表現する方が分かりやすい場合には、そのような表現にしても全く問題がありません。

当然、学部の授業と異なり、例えば特別研究などのような大学院の授業のように、どういう受講生が履修するかを見てから決めるといことでしたら、シラバス作成前にテーマの候補を分野内で相談し、それをここにあげておくといいでしょう。

最後になりますが、信州大学で、最も重視するのは、下記の3点です。

- ①授業の達成目標及び想定する水準（＝成績評価基準）を受講生と教員とが共有できる。

- ②授業の達成目標に受講生がどういプロセス（＝授業で理解できるように配置された諸課題）を経て到達するのかが分かる。
- ③受講生がシラバスを見て予定（＝予習すべき内容、学外実習や中間試験等の日程）を立てることができる。

当センターでは、FDとして個別授業のコンサルテーションをさせていただいております。授業デザイン、シラバスを書く際にご不明がある場合は、いつでも当センターに声をおかけください。

（高等教育研究センター 講師 李 敏）

2019年度 高等教育研究センター年報



加藤 敏三（副センター長）

『3つのポリシーガイドライン』以降、学修成果という出口を重視するという考え方が既定方針となっています。そういう大きな流れを意識し、センター全体としては、昨年度から引き続き今年度も、組織と個人の両方のレベルで「出口」（＝卒業時点での学修成果＝DP）を重視した教育の質を保証する仕組み作りに注力してきました。今年度は、特に、①授業ごとの学修成果を担保する仕組み（の一部）である授業アンケートの実質化、②授業達成目標の内容と想定レベルをCPに基づき調整するための仕組み作り、の2点に注力してきたつもりです。

個人としては、授業アンケートを授業の重要な一部として位置付け、学期最後の授業で一斉にアンケートに答える、というやり方の意味を解説するFDを行ってきました。中期計画関係では、例年の通り、中期計画の円滑な遂行を目的に、全学部を年に2回訪問し懇談会を持ちました。

言語学関係では、平成28年度に獲得した科研費による研究を一年間延長し、その研究成果を言語処理学会第25回年次大会（NLP2019）で「最終手段の格マーカーとしてのデーテ格の意識：逐語訳ダブル対訳コーパス」というタイトルで発表しました。

矢部 正之（教授）

高等教育に関わる研究開発の取組は、情報通信技術（ICT）を利用した教育を中心に行っています。この分野に関わるケータイ活用教育研究会を毎年松本で開催しており、本年は8月23日に次世代大学教育研究会と共催で開催しました。同研究会において、研究発表「学習者をアクティブにICTをどう活かすー」を行いました。早期キャリア教育に関して2016年度から会長として取組んでいる長野県若年層人材戦略研究会は、「信州エクスターンシップ」の事業終了に伴って運営形態を変更し、その事務局を担当しています。同研究会のネットワークを活かし、地方の若年層人材戦略について、引き続き企業・団体・行政等と高等教育機関の情報交流を中心に活動しています。

加藤 善子（准教授）

来年度の認証評価受審に向けて、信州大学の教育の質保証システムの構築に従事し、それを踏まえたシラバスFDや、部局での質保証システムのFD活動を始めました。オンラインFDも刷新していくこととなりますので、どうぞご活用ください。

研究では、「学習支援を学修成果に結びつけるための設計と運営」『大学教育学会誌』第40巻第2号（2019）および「学習支援における図書館の役割を考えるー学習支援プログラムの統合を通してー」『信州大学図書館研究』第8号（2019）の、2本の論文を上梓しました。教育の歴史研究も細々と続けており、「教育史研究の周辺」と題して『月間ニューズレター 現代の大学問題を視野に入れた教育史研究を目指して』に12回連載を続けました。科研費「近代都市における中等教育利用に関する基礎的研究-実業層の学校利用を中心に-」（基盤C・4年）が採択され、時間をやりくりして有名進学校の灘中学校・高等学校の資料室に通っています。

李 敏（講師）

学内では、引き続き「学習に関するアンケート」などの調査の実施と分析及び大学院関係の仕事に携わっています。

個人研究では、新たに採択された科研（基盤C）「日本留学の長期効果に関する研究」をめぐり、「海外における日本学研究者の育成ー北京日本学術センターを事例に」（『留学交流』特集「グローバル人材育成のこれから」、2019年1月号（Vol.94）：19-31 2019）、「日本における外国人留学生の採用ー『高度外国人材』という虚像」（『大学論集』第51集：17-32 2019）を上梓しました。また、人文・社会科学教育の国際比較研究の一環として、「中国における通識教育の新しい展開ー3大学の事例研究を中心に」（『総合人間科学研究』、（第13号）：137-148）を執筆しました。その他、日本の教育関係学会の国際化問題や、日本における外国人研究者の研究などの高等教育の国際化の研究を新たにスタートしました。

スタッフからひとこと



高等教育研究センター発足の翌年である平成24年度末まで学務課でお世話になり、農学部、経営企画課、産休・育休を経て、本年4月にまた戻ってまいりました。2回目の「スタッフからひとこと」です。微力ながら、以前いた際の反省点や学部での経験を少しでも活かしていければと考えております。どうぞよろしく願いいたします。

（学務課教務グループ 小林 加奈）